事例No.	1307
公表年度	R1
団体の属性	町村
団体名	高知県津野町

事例区分	地域活性化

タグ	・関係人口 ・移住定住 ・副業・兼業活用

事例種類	関係人口

事例内容・タイトル

「人がいない」から「人でにぎわう」津野町へ

出典

関係人口創出・拡大事業（裾野拡大型・裾野拡大（外国人）型）成果報告会

「関係人口創出・拡大事業」
（裾野拡大型・裾野拡大型（外国人型））成果報告会

「人がいない」から「人でにぎわう」津野町へ

（津野町）

発 表 資 料

1.地域概要・地域課題・事業に取り組む背景

地域の概要

地域名：津野町
人　　口：5,731人（令和元年12月時点）

- 高知県の中西部に位置。総面積の約90%は林野
- 「四万十川」、「新荘川」、2つの源流点と日本三大カルストのひとつ「四国カルスト・天狗高原」を有する町。





- 主要産業：農業（茶、ショウガ、ミョウガ、ナス、ネギ、シシトウ、花）、林業、建設業
- 高知県下で「集落活動センター」を推進。小学校跡地等を拠点とした「集落活動センター」を開設、集落活動の維持・永続を目的として、地域内外との交流活動や防災、高齢者の見守り、移住者の受入対応など様々な活動を実施。
  津野町内→3ヶ所開設（高知県全体：58ヶ所）

解決したい地域課題

- 活動主体となる地域住民の高齢化と若者の人口流出によるマンパワー不足、SNSなどの情報技術の活用不足が課題
- イベントのスタッフ不足
- 各活動の後継者不足
- 耕作放棄地の増加

本事業に取り組むに至った背景

- 「やりたいことはあるがやる人がいない」「資源はたくさんあるがそれを活かせる人がいない、活かし方がわからない」
- 関係人口増
  →地域の人だけではできないこともできるように。
  →外の視点を活かした新たな取り組みを行うことで地域の方の活動意欲を高め、様々な活動の起爆剤に。

2. 事業概要

●事業概要

＜ターゲット＞
- 首都圏の大学生を中心とした若者

＜概要＞

セミナー形式で実施
- 首都圏で事業説明会を実施し、セミナー受講生を募集
- フィールドワーク・ワークショップで「関わり事」を発見してもらう
- フィールドワーク・ワークショップで得たことを実践に移して関係人口になってもらう
- 東京農業大学のイベントに参加し、津野町も関係人口として関わりを持つ
- 関係人口について理解を深める講演会を実施（町民向け）

＜実施事項＞

①事業説明会　１回
②（ア）現地フィールドワーク　１回
　（イ）ワークショップ　1回
③関係人口の受け入れ　複数回
④東京農業大学のイベント参加
⑤町民向け関係人口講演会　１回

●地域の理想の姿

- 担い手不足や高齢者では作業が困難な草刈りや田畑の維持管理を関係人口が担い、里山風景や景観が維持されること
- 町民にとっては当たり前に感じている自然や山、川の資源を、都市部の若者の視点、町外の人の視点を活かして新たな活用方法を見出し活動が広がり、多くの地域住民を巻き込み地域活性化につながること

●理想を実現するための本年度事業の位置づけ

- 自分たちだけでは出来なかったことができるようになることで関係人口の重要性を感じてもらう
- これまで取り組んできた活動や普段の生活の中にも既に関係人口は存在していることに気づいてもらう

●本年度の目標

- 事業説明会参加者　　５０名
- 町民向け講演会参加者　５０名
- フィールドワーク参加者　　１０名
- サイトビュー数　　２０２０年１月末時点　２，０００ビュー

- 大小関係なく町・地域と関わってもらう
- 関わりに向けて動き始める

3.事業実施体制・スケジュール

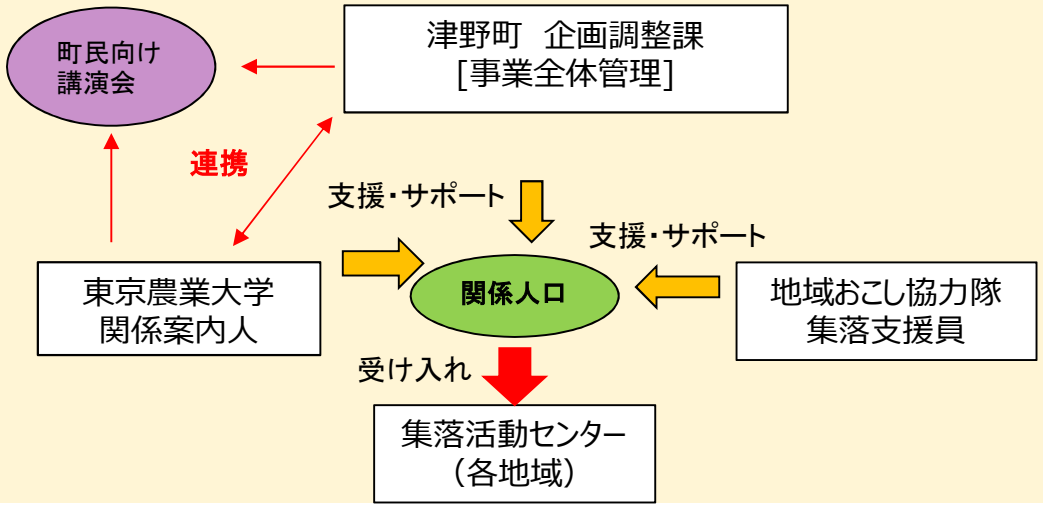
●事業実施体制（受け入れ体制を含む）

- 町が事業の全体管理、説明会募集・広報や、地域住民及と関係案内人、セミナー参加者との仲介、調整を担う

- **関係案内人の概要・役割**

・既に地域との関わりのある東京農大生を関係案内人とし、これまでの活動で得た経験を活かしながらセミナー受講生と地域とのマッチング

・若者の視点を活かし、広報活動や各実施事項が効果的なものになるよう町と協力



●スケジュール

	実施事項	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	目標の達成状況
		上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
1	集客・広報（HPでの情報発信とフェイスブックでの各種広報活動）	掲載情報の整理					HP・フェイスブックによる随時広報等						HPで事業参加者を募集 フェイスブックでは、様々な活動を掲載している。
2	東京での事業説明会 準備・開催 事業参加者決定		開催準備	事業説明会開催 ★	★ 事業参加者決定								7/31事業説明会開催。参加者10名（目標50名）。うち、5名が現地フィールドワークへ参加。
3	関係人口のニーズ・地域課題の調査			★	★								事業説明会参加者10名、津野町内講演会26名へアンケート調査の実施。
4	津野町民向け関係人口講演会			開催準備	★								8/6の津野町民向け関係人口講演会の参加者26名（目標50名）。
5	現地フィールドワーク				開催準備 ★								事業説明会参加者10名のうち5名が現地フィールドワークへ参加。
6	ワークショップ				開催準備	★							事業説明会参加者10名のうち5名がワークショップへ参加。
7	実践					実践活動							事業参加者がイベントの参加など実践活動を行っている。9月稲刈りへ10名が参加。10月町内イベントへ7名が参加。12月東京農大でのイベントへ町民・事業参加者が参加

4.事業の「ターゲット」

●事業のターゲット

- 首都圏の大学生を中心とした若者

●参加者募集のターゲットの設定経緯

- 東京農業大学や高知県立大学などと大学連携を締結

→既に大学生などが活動している地域もあり、関係人口を首都圏の大学生を中心とした若者をターゲットにすることで、若者同士で活動を行うなど、町や地域と関わるきっかけが見つかりやすい

●ターゲットへの広報・アプローチ

【実施事項】
□**事業説明会についてのビラ配り**
　配布先：東京農業大学、ゼミ・サークル、関連施設
□**雑誌ソトコトのSNSによるPR**
□**関係案内人や町役場、その他関係者の個別ネットワーク（SNS）による広報**
□**本事業専用のフェイスブックページを作成し、活動内容を発信**
関係案内人である東京農業大学の学生が中心となって専用ページを作成。活動内容のほかにそれぞれの取り組み内容や活動の裏側などを情報発信した。

【成果・効果】
事業説明会・・・10名参加（学生７名、社会人３名）
関係人口の提唱者である指出氏をはじめ、ソトコトの強力な発信力の影響もあり、事業説明会には学生だけではなく一般社会人も参加するなど効果があった。

フィールドワーク・ワークショップ… ５名参加

5.関係人口の活動内容

●参加者（関係人口）が取り組んだ活動の内容

フィールドワーク

【日時】8月21日～23日
【会場】津野町内全域
【参加者数】5名
事業説明会に参加した10名のうち、5名がフィールドワークに参加。地域住民と交流し、振り返りシートに「地域の強み・弱み」「解決したい課題」「可能性」など気づいた点を記入してもらい関われる事を探した。





津野町民向け関係人口講演会

【日時】8月6日
【会場】津野町役場
【参加者数】町内外から26名が参加　（うち役場職員15名ほど）
関係人口を受け入れていくためには、受け入れる地域側の関係人口に対する関心と理解が必要不可欠であることから、町民と町役場職員向けの関係人口講演会を実施。





5.1　関係人口の活動内容

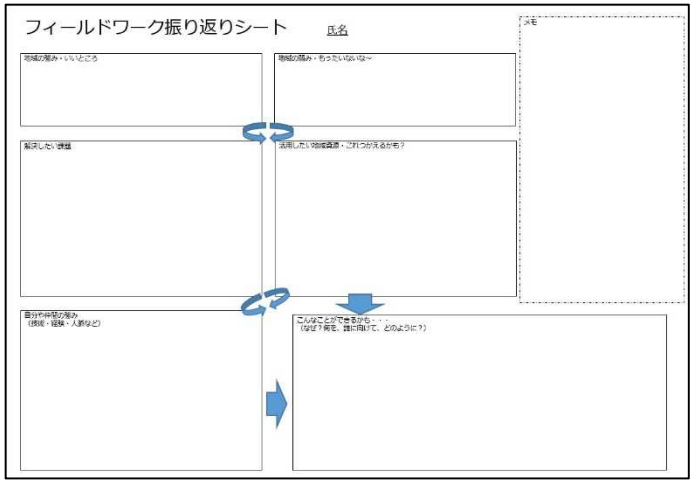
フィールドワーク・ワークショップの様子







フィールドワーク時には、振り返りシートに気づいた点など記入してもらった





6.活動の成果

●本年度の目標達成状況

- 事業説明会参加者　１０名（目標：５０名）
- 町民向け講演会参加者　２６名（目標：５０名）
- フィールドワーク参加者　５名（目標：１０名）

参加者が少なかった原因
- ✓ 町の知名度が低かった
- ✓ 類似のイベントが多く、その中で当説明会が選ばれるための魅力が不足していた
- ✓ 開催日時が、平日の夕方という忙しい時間帯だった

ただし、
一人ひとりとのコミュニケーションがしっかり取れたことや、参加者同士の距離が縮まりやすかったなど、少人数のメリットがあった。

●関係人口の地域との関わり方

- 東京農業大学「収穫祭」で津野町船戸地域のおからパウダー、精華地区のお茶を販売



- ツノチャ・マルシェ情報発信係としてイベントに参加
- 関係人口セミナー参加をきっかけに、高知県のイベントに参加

●その他の成果

- 関係人口から地域おこし協力隊へ就任
- 関係案内人も関係人口に
- 農作物の販路拡大の検討開始
- 地域の方にとっては、自分たちが作ったものが都会でも売れたことで自信につながる





7.課題への対応

●事業で直面した課題とその対応策･解決方法

＜関わるきっかけづくり＞

- 事業説明会でのアンケート調査で「関わり方がわからない」という回答が多かったことを受け、関わりやすいイベントや行事をフィールドワークやワークショップの際に案内した。結果、それをヒントに関わり事を決めた方もいた。

●今後の課題と対応方針

- （1）関係人口を増やし、継続的に関わってもらうためには時間が必要
- （2）関わりたいけどきっかけがない、関わり方が分からない
- （3）交通費、旅費が高い
- （4）役場職員の負担

8.将来への展望

●来年度以降の関係人口とのかかわり方

東京農業大学学生の関係人口
- 地域に入って田植えや稲刈りなどに関わってもらい人材不足を補う
- 収穫祭など大学のイベントで津野町の特産品を販売しPR、情報発信
- 関係人口がさらに関係人口を生み（大学の後輩など）継続した関わりにする
- 今回活用したFacebookページ「高知・津野町ツノヤマ学プロジェクト」で関係人口拡大にむけて情報発信を行う。
  （活動の紹介、イベント、関わり方の紹介など）
- 東京農業大学代田キャンパスでのお米販売の検討

セミナー参加者B氏
- 薬草の活用についてプランが具体的になれば支援

●「関係人口」施策の展望

- 町民の理解向上
  関係人口を受け入れる地元住民が、地元にどのような課題があって、その課題を解決するためにはどのような関係人口が必要なのか、という「課題」と「求める関係人口」を明確にし、関係人口について正しい理解を深めることが重要
  → 関係人口についての講演会や研修会を来年度以降も実施し、受け入れる側の体制を整える

- 既に関係人口となっている人を見つける
  ①棚田オーナー制度　②大学生との連携事業　③地域で取り組まれているイベント　など

- 移住・観光事業と組み合わせて実施

- セミナー形式で関係人口創出を行う場合
  課題を設定して、受講生を募集する